

イクスカーションに参加して
川井克司(金沢大・医・解剖)

前日の三国観光ホテル・コンベンションホールでの熱のこもったセトロロジー研究グループ研究発表会や夜の懇親会の余韻を感じながら、6月7日朝約二十人の参加者が数台の車に分乗してイクスカーションへと出発した。イクスカーション(観光)とは言うものの、この研究グループの多くのメンバーが水族館関係者やクジラなどの海洋生物に興味をもつ人達であることを考えれば、その一番の目的が水族館の見学になるのは当然だろう。

天気は薄曇り。最初の訪問先は東尋坊である。私が前回(約二十年前)訪れた時に比べると当時よりみやげもの屋もふえたように思われ、その有名観光地としての繁栄ぶりをうかがわせた。しかしその陸地側の雰囲気とは裏腹に断崖自体は我々現代人に自然の持つ不思議な力とそれが造り出すスケールの大きな造形美を感じさせてくれる。

次に我々は越前松島水族館を訪れた。そこではイクスカーション全体の案内もして下さっている越前松島水族館の鈴木さんの案内で一同館内を見学させてもらった。同水族館も私にとっては二度目の訪問ではあるが、前回はやはり二十五年も前のことで、記憶はあまりなく波打ち際で小動物を捜して遊んだことばかりが記憶に残っている。中心となる水族館部分はおそらく当時の建物と同じだと思われ設備が古そうではあるものの、一つ一つの水槽にはそのような古さをなるべく感じさせずにしかもいかにすれば見学者に楽しく見易く見て貰えるかということ考えた工夫が、画一的にではなく個々の水槽に合わせて成されているように感じられ、最近一つの流行のように新しく近代的な水族館がどんどん建てられている状況の中でその設備の古さを何とか補おうとする職員の人達の熱意が伝わってくるように思われた。部外者が勝手に推測させて貰うならば、水族

館はそこを訪れる人達にとっては娯楽施設でありまた水生生物に関する知識を提供してくれるある種の教育施設であると同時に、中で働く人達にとっては研究機関でもある。そのような二つの面をいかにバランス良く共に向上させていくかということには非常に苦勞が伴うものと思われる。

さて最後に我々は「みくに龍翔館」という郷土資料館を訪れた。この資料館はそのパンフレットによると昭和56年に港町三国の文化遺産を守り伝えるために、明治時代に建てられた龍翔小学校の外観を復元して建てられたものだそうだ。明治時代の建物の復元でありながらオランダ人土木技師エッセルのデザインによるために西欧風のとても素敵な建物であった。館内には三国を中心にその周辺地域の地質学・生物学に関する標本から古代史に関する遺物やさらには北前船の寄港地として江戸時代・明治時代当時のその繁栄を物語る品々、更に三国に係わる近代文学者の遺品や三国の人々の暮らしに関した品々が多く展示されており、三国の過去の繁栄ぶりや人々の生き生きとした様子を今でもうかがい知ることができた。

この「みくに龍翔館」でイクスカーションは一応終了した。最初にも書いたようにこの研究会に伴って行われるイクスカーションは、会の性質から水族館もしくはそれに類する施設の見学が中心となるのは当然ではあるが、それにとどまらずせっかく訪れた土地の歴史や文化をも知ることができるような企画は私にとってはとても良かった。それにしても私はただの団体観光客のようについて回っただけであり、このような企画の準備や実際の案内役へと奔走して下さった越前松島水族館の人達には文面をかりて心からお礼を申し上げる。